

集は別巻になつて傳はつて居るが、それとこの「昆布蒨」の巻末の繪とは、殆ど全部が同じものだといふから、乃ち文章を省き去つた一異本である。

一 寛政二年の全部は日記が書かれなかつたか、又はまだ出て来ないことになる。同三年も次の「蝦夷の手振」を寛政四年とする高倉君などの説に従へば、もう他には一つも記録が残つて居ないわけである。

寛政三(一七九一) 三八歳

蝦夷の手振(秋四)

- 五・四 東場所一見の旅に上る 送別の歌を贈る者 文子の方・下國季豊・稻荷の神主佐々木一貫 荒町の宿を出で エケフの濱より船に乗る 白神崎風波荒く 午時荒谷村に船を寄せて 河森傳次郎の家に宿す
- 二五 船出でされば陸路山を越えて 宮の澤・茶屋峠 レヒケの浦の長齋藤吉兵衛が家に宿す

- 二六 昆布採舟に便乗して 白府・福島島の沖を過ぎ 山背泊・矢越山・小田西こたにしより ウスンゲツ(函館)などを経て ヤケマキの浦に船を繋ぎ 村人の家に泊る
- 二七 同じ舟にて小安・釜屋・汐屋岬 トユキの浦にて蝦夷舟に乗りかへ ネタナイといふ處に泊る

二八 蝦夷舟にて海を漕がせ トドホツケを経てヲサツペに着き 運上屋に宿す

二九 同じ舟に乗り カツクミ・イタンギ ウシジリの運上屋にて舟をかへ ビルマ泊・ウムシヤ泊を経てトコロまで 又ザルイシ・シユシユベツ・シリカベツ(鹿部)まで

三〇 陸路 出来間より山に入り 相泊 サハラに泊る

六一 朔 懸り間を過ぎて オシラナイに一宿

二 鳥井が崎・石河原を経て モナシベよりヲトシベ迄蝦夷舟 ノタオキを過ぎ モノダキに泊る

三 フルシベコタンより蝦夷舟 ヤムヲコシナイまで ユウラップ其他幾つかの川を

- 渡り シラリカのウセツベといふ蝦夷の家に宿す
四 ホロナイ・ムクンスキ ヲシヤマンベにて青山芝備しげよしが假屋に宿す
七 舟にてこゝを立つ ゲポロオキ・リブンゲツブ・ヘンベ・フウレナキの前を漕ぎ虻田の運上屋に至る
二〇 二人のアイノに案内させて有珠岳に登る 山頂より路をかへてウシヨロに下り日暮に虻田に還る
二 蝦夷の鶴の舞といふのを見る 雨降る

一 この記行が寛政三年のものといふ積極的な證據は無い。二年又は四年のものとも見ても、日次は抵觸はしない。たゞ此際はまだ松前の城下に住み馴れて、交友も多くなつて居るところから、この年の事ではなかつたかと想像するだけである。四年ではなからう。

寛政四(一七九二) 三九歳

- 正・朔 福山の城下 こたて阪の天神社の傍の寓居にて年を迎ふ
七 赤石吉満を訪ふ 氏家俊子の家に歌會あり
二・朔 泊川の海邊の家に宿す
三 僧即心の五百羅漢中供養あり 俗名高橋長介 出羽村山郡宮崎の人
五 隠了禪師の京に上るを送る
二四 すま子の館に行く
閏二・七 僧祖英(雄?)東磯の荒谷にて示寂
八 磯館の賤子が伊勢に行くを贈る 故郷の三河に書狀を托す
二四 野遊 北川時房 孫せん子を伴ひ参加
二六 下岡季盈を訪ふ
三・朔 北川菅子訪れ來る
福山の寓居生活

- 三・五 吉田一元三週忌に歌よむ
- 三 北川すが子紅梅の枝を贈り來る
- 六 小林某が家の花を見る
- 三 青山さち子の家に行く
- 三 新井田某を訪ふ 氏家千枝子に歌を贈る
- 二五 およべ村に遊び 李の花を見る
- 五・四 神職某敬武訪ひ來る
- 元 人を送りて荒谷まで 祖雄和尚の墓に詣つ
- 三 白鳥義武が家を訪ふ
- 五・二 松前則忠が家を訪ふ
- 四 某保壽の家に行く
- 一七 雨中西館に行く

一 この日記の後、「千島の名残」と題した日記のあつたことが、「牧の冬枯」の序文に見えて居るが、まだ發見せられて居ない。幸ひにそれが出て來たら、「蝦夷乃手布利」の此年のものでないことがわかるかもしれぬ。

五

寛政四年

牧の冬枯(秋五)

一〇・朔 福山に在り。

五 初雪

- 七 福山出發 泊川の岸より船に乗る 佐々木信英送別の句 土田直躬は歌 海上平らかに船は奥戸(下北郡)に著く 小谷某が家に宿す
- 八 磯づたひに赤石・材木・原田を経て 佐井に行く 奥戸に返る
- 一〇 中山越をして大間・釜屋・易國間・下風呂・赤川・木野邊 大畑に著き 堺某が家に松前を去る

宿る 滞在

三 寶國寺に深阿上人を訪ふ

三 池田包幸歌を贈る

五 池田道賢と會して歌をよむ 又某慶政・邦政等と唱和す

三 里正村林鬼工(時明)消息す 大畑を立ち「小目名・正津川・川代・關根・椀山・女館」を過ぎて 田名部に入り 新相某といふ旅舎に宿す

三 川島恒方を訪ふ・中島公世(富右衛門)に逢ふ

三 雪路を恐山に登り 山上の寺に宿す

二・朔 處々の地獄を見巡り 田名部に還る

二 菊池成章消息

五 常念寺の巖益上人を訪ふ

六 山本保列消息

八 醫師吉田懷眞を訪ふ

〇 圓通寺の冠古上人を訪ふ

三 秋濱武憲消息

元 吉田晴美を訪ふ

三 松前より音信あり 綿入を贈り來る

二五 菊池清茂消息

三・三 智愚庵の實元上人を訪ふ

五 徳元寺の寂隆上人を訪ふ

三 大畑に行き 田中直躬が父の家に宿す

元 田名部に還らんとして 風雪の爲に 途中正津川のあたりの民家に宿す

三 雪を犯して田名部に歸着す

三 此の地にて年を越す

下北半島諸處

寛政五（一七九三） 四〇歳

奥の浦々（秋五）

- 四・朔 佐井の湊を發して 舟にて下北半島の西海岸を巡遊す 山々の櫻花盛り也 牛瀧に上陸して 浦の長坂井某の家に宿す 佐井の醫師三上温に逢ふ
- 四 歸路福浦に上陸して山を越え 長濱・長後を過ぎ佐井に着す 澁田氏の家に宿す
- 六 發信寺に珠阿上人を訪ふ
- 六 佐井を辭して 陸路再び西海岸を行く 長後に泊る
- 七 長濱より山を越えて福浦へ 途中に猿多し
- 八 福浦を立ち 山を越えて牛瀧に至り 坂井氏に宿す 病あり滞留
- 七 牛瀧より舟にて大荒川の口まで 流れに沿ひて山に入り 源藤次郎といふ山村 鴻貝・瀧山の二村を経て 黄昏に脇野澤に着き 村長の家に泊る
- 元 滞在 脇野庵の僧大仙を訪ふ 相州足柄の人といふ

元 九艘泊に行き 再び脇野澤に還る

五・朔 出發 小澤・鯛崎・宿野邊を過ぎて 河内に泊る

二 田野澤・戸澤などを経て城が澤

三 宇多・河森・金谷を経て 田名部に還る

二五 再び恐山に登る 山上の菩提寺に宿す 川島某に逢ふ

二七 田名部に還る

六・二 又恐山に登る 優婆堂に宿し 温泉に浴す

二四 田名部に還る

同じ年

牧の朝露（秋六）

七・朔 田名部を立ちて大畑 田中氏に宿す

八 再び田名部へ

二〇 赤阪野に遊ぶ

恐山に登ること三たび

- 二 大畑に行く
- 三 大澤に行き 某龜丸が家に宿す
- 六 大畑に還る
- 七 明日の祭禮を見に 田名部に行く
- 三 大畑に還る
- 六 羽色山の冠岩を見に行く
- 六 大澤に行きて滞在す
- 八・二 下風呂の温泉に行き二泊
- 三 易國間いんくまの中井業陳なりゆが家を訪ひ滞留す
- 九・五 爰を立ちて桑畑の浦に行き 祭禮見物
- 六 下風呂の湯に宿す
- 九 黒森嶽に登りて紅葉を見 大澤に下りて宿す

三 大畑の田中氏に還る

同じ年

尾駁おしちのまき乃牧のまき(秋六)

- 二〇・朔 なほ大畑に在り
- 八 初雪
- 二 心光寺の老僧音柳上人に見ゆ
- 三 大畑出發 田名部の新相旅館に宿す
- 三 山本世獻が家に會す
- 二・四 村木某が家に會す
- 九 送別の詩歌を贈る人々 菊池教政・同清茂きよしげ・徳玄寺の僧寂秀・醫師吉田懷貞・河島尙方など
- 三 田名部出發 石神・田屋・青平を過ぎ砂子股すなごまたの小家に宿す

再び旅に上る

- 元 大雪の爲に滞在す
- 二 出發 小田野澤より東海の岸を行く 風雪に妨げられて大井邊の村に宿す
- 三 牛の背に乗りて白糠を過ぎ 泊の浦の村長種市某が家に宿す
- 三・朔 大乘寺の哲譽上人を訪ふ 出發 雨に遭ひて引返す
- 二 再びこゝを出て 吹雪の中を出戸に至り 滞留す
- 五 牛に乗りて出發 尾駁村に至り 木村某が家に宿す
- 七 前途積雪に塞がると聞きて 再び田名部に引返さんとす 出戸を過ぎ泊りに至り 雪の爲に滞在す
- 三 舟を雇ひ白糠まで 老部およぶに來て一泊
- 三 小田野澤より山路 砂子股に泊る
- 四 夕方に田名部に到着す
- 八 病起りて此地に年を迎へんと決心す 菊池道幸(重右衛門)の家に寓す 松前の人

人よりの書信を受取る

- 二 元 此月は小なれども 南部の私大と稱して 翌元日を除夜とす

寛政六(一七九四) 四一歳

奥の手風俗(秋六、眞)

- 正・朔 田名部に在り この日歳末の行事くさんあり 二日を元日とす
 - 二 西 若山叙容が家の天神祭を見に行く
 - 二・二 恐山に登る 菩提寺に泊る
 - 三 山中を巡り 杣小屋に一泊す
 - 四 山を降る
 - 二 七 醫師吉田晴が松前に行くに歌を餞す
 - 三・五 大畑に行く 途中初めて鶯を聴く
 - 三 恐山の湯に土田直躬を訪ひて宿す
- 田名部に引返す

言 なほ恐山の湯に在り

同じ年

おくのふゆごもり
游遇濃冬隠(秋六)

- 二〇・朔 田名部を出て 石持村の石神に詣で 民家に宿す
- 二 目名を過ぎて 田名部に還る
- 四 某友主といふ者訪ひ来る 越前敦賀の人
- 二一・〇 赤河の瀧を見に行く 途次池田の龜丸が庵に宿す
- 二 瀧を見て後 赤河に一泊
- 三 湊の醫師今井常通を訪ひ一宿
- 三 大畑に出て 菊池常親が家に宿す
- 元 午後大畑を辭して 關根村にて夜路に迷ふ 村長與左衛門が家に宿る
- 二〇 田名部に還る

閏二・二〇 若山叙容の家に移り寓す

三・六 三たび田名部にて年を送る

一 序文には寛政七年とあるが、七年の冬は既に津輕に入つて居る。其上に十一月に閏のあったのは寛政六年である。

一 下北半島での日記は、まだこの外に「牧の夏草」といふのがあつた。又「蝦夷が岩屋」といふのも、此土地で書いたものと思はれるが、二つともまだ我々の目には觸れない。

六

寛政七(一七九五) 四二歳

「津輕の奥」の一(秋六)

三・三 南部津輕二領の堺 馬門と狩場澤の二つの關を越え 小湊に至る 問丸官島某が家に宿す

南部から津輕へ

- 一三 雷電社を拜し 椿崎に行かんとして田澤の浦に至る 雨の爲に村長が家に三泊す
- 一六 椿崎見物 浦田といふ處の民家に宿借る
- 一七 板橋といふ山村を過ぎ大路に出で 蛇塚を経て 笹石の浦にとまる 三十日まで滞在

一 「津輕の奥」は後人の假に付した題名で、短い日記四種を合綴して一巻としたものである。その最初的一篇は外南部を辭し去つて、津輕領に足を踏入れた際のもと思はれ、第三編の寛政八年正月の記事に先だつて居るから、同七年の春の筆と見てよい。其次の一篇も、久しぶりに津輕の平野を横ぎつて弘前に入り、多くの新しい人に逢つて居る日記だから、同じく七年のものであらう。

同じ年

同上の二

- 一〇・五 青森を出發 弘前に向ふ 濱田・菟役・荒川・高田を過ぎ まみの阪を越え小館(中

野) 村長が家に宿す 雨雪の爲に滞在

- 一九 入内(田山)に至り宿かる
- 二〇 黄金山神社に登らんとして雪の爲に果さず 泉澤・高陣場を経て 王餘魚澤に出で終に泊る
- 二一 強清水を経て 辛うじて下王餘魚澤に出で宿を求む
- 二二 浪岡の八幡に詣で 女鹿澤に至り 福士某の家に宿す
- 二三 水木村に毛内茂齋を訪ふ 齋藤規房に始めて逢ふ 滞留
- 二四 朔 毛内氏を辭し 二双子・増館を経て 竹が鼻村に舊知間山祐眞を訪ふ
- 二五 黒石に赴かんとして 二双子の醫師館山養泊が家に宿す
- 二六 出發 黒石に至り 醫師高田惠民が家に宿す
- 二七 牡丹平・花巻・豊岡・中村等を通りて ぬる湯の古澤といふ家に宿す
- 二八 板留の湯を見て 黒石に還る

弘前の舊友新友

- 一 黒石出發 猿賀・和徳を経て 夜に入りて弘前に着 問丸前田氏に宿す
- 二 舊知諏訪行宅の墓を弔ひ 毛内茂幹が宿所を訪ふ
- 三 齋藤規勇を訪ふ 嶺松院の玄定法印に逢ふ
- 四 楠美則徳に招かる
- 五 津田仙庵を訪ふ
- 六 弘前を立ち青森に向ふ 水木の毛内氏に宿す
- 七 こゝを出て 女鹿澤に来て泊る
- 八 浪岡・徳才子・大釋迦等を経て 津輕阪を越ゆ 新城まで櫓に乗る 大濱に着き上林の神主澤田兼悉が家に宿る
- 九 青森に歸着す

寛政八(一七九六) 四三歳

同上の三

正・朔 浅蟲の湯に年を迎ふ

三 小湊に行く 二十五日まで爰に在り 大雪降る

二・朔 平内(東津輕郡)に在り

同上の四

三 浅蟲を経て 野内の柿崎氏に宿す

四 青森に至り 雪の爲に滞留す

五 油川に行く 澤田氏に宿す

六 水木の毛内氏に

七 弘前に至り 毛内茂幹の宿に入る

三・朔 百澤村に行き 百澤寺に宿す

四 久渡寺の観音に詣で 朝音上人に逢ひて語る 滞留

七 弘前に還る

東津輕の正月

一九五

- 八 弘前を立ち水木へ 滞在
- 五 松倉の観音に詣でんとして雨に遭ひ 石澤より水木に引返す 途中館の越村に山崎元貞(立卜)を訪ふ
- 六 徳下・新町を過ぎ黒石 一双子村に来て泊る
- 元 女鹿澤に来て雨に遭ひ宿とる
- 四・朔 浪岡に至り 平野氏に宿す
- 三 中野の西光庵を見に行く

同じ年

「外濱奇勝」(秋六)

- 六・朔 弘前の中井白駒が家に昨夜着
- 三 武蔵國の旅客樋口淳美(道泉)に逢ひ 其日記「外が濱」を借りて讀む
- 五 雨降る 遠藤直規より消息

セ 水木の毛内氏に行く

- 二 爰を立ちて富柳・福館・樽澤・高野などを過ぎ 夕顔堰の金恒徳(玄秀)が家を訪ひて宿す 病を得て滞留す
- 一七 出立 五林平・羽木澤・原子・神山・平町・小田川などを経て、喜良市の村長岡田某が家に宿す
- 一八 金木の八幡社に詣で 社司佐々木某が家に憩ふ 河倉村の村長三箇田氏の家に宿をかる 附近のしゝの瀧湯に浴す
- 三 八幡・深江田などを経て 中里の米家庄太郎といふ商賈の家に泊る
- 三 尾別・薄市・今泉を過ぎて 相内に着く 酒賣る三輪某が家に
- 三 安部館の舊跡を巡覽して 小泊の湊に至る
- 二四 七つ瀧を一見し 算用師越の近くまで行きて引返し 小泊を過ぎて下枉といふ海端の僻村に行き三泊す 附近の風景を見てあるく

- 二七 出發 十三の湊まで 能登屋に宿す
- 二八 湖岸の路を行く 富港を過ぎ 正子(袴湯)に泊る
- 二九 車力・牛湯・平瀧を過ぎて 館岡に泊る 今いふ瓶が岡の遺物出土地なり
- 三〇 出立 薦槌・吉水・長田から木造 工藤定富が家に宿す
- 三一 山崎の醫師島田某が家に憩ひ 鱒ヶ澤に至る 杉浦氏に宿す
- 三二 出發

三三 深浦の竹越里圭が家に在り 此日爰を立ちて椿崎に遊び 澤邊村を経て岩崎 菊池某の家に宿す

- 三四 濱中を経て松神村 大屋の家に宿す
- 三五 黒崎を過ぎ大間越 菊池某の家に宿す
- 三六 出發

一 「外濱奇勝」も筆者の設けた書名ではないらしく、やはり數篇の日記を合せて一卷とし、其序次も前後して居るやうである。この一節は始めて深浦に入ったとあるから、次の「雪の瀧」より前といふことだけは明かである。

同じ年

雪のもろ瀧(秋六)

- 二一 暗門の瀧一覽の爲に 深浦を出發 夕赤石に著し 寺澤氏に宿す
- 二二 赤石を出で 日照田・目内崎を経て 種里の臥龍軒(寺)に宿す 主僧牧山達童上人と語る
- 二三 深谷・松代・杉が平を過ぎ 湯段の湯の長兵衛が宿に泊る
- 二四 白澤・太秋を経て村市村
- 二五 壘平・守澤 村市に引返し 檜の剝舟に乗りてやうく川を渡る 宮守平よりをさ橋を渡り河原平村 米澤長兵衛が家に宿す

岩木山をめぐる

- 二・朔 雪積む山路を分けて 暗門の瀧を見る 山小屋に宿借る
- 二 河原平を経て村市に還る
- 四 長面村・夏菩提村を過ぎ 櫻庭の観音堂を拜し 國吉村の酒屋竹内氏に宿す
- 五 大雪 坂本・中野を経て百澤村 齋藤規房の寓居に着く
- 六 新法師・宮地・五大・吉田より 高屋・蒔苗・獨孤を経て高杉
- 七 住吉・鬼澤・藤井・貝澤・十面澤より十腰内 鯨ヶ澤に出で、夜路を赤石まで 寺澤氏に宿す 三泊
- 一〇 馬にて深浦に還る

一 この日記の中には、この春同じ百澤の地を訪れたことが見えて居るから、寛政八辰の年の冬であつたことは明かである。

寛政九（一七九七） 四四歳

津輕のをち（秋六）

- 正・朔（西津輕郡）深浦の湊にて年を迎ふ
- 二・朔 寺田貞於再び深浦に来る
- 三 竹越貞恭の家に會す
- 〇 圓覺院に行く
- 四・二 笠島行憲に逢ふ
- 五・五 輪島波丈と連句
- 六 佐渡の醫師大久保似松に逢ふ
- 七 深浦を立つ 風合瀬・晴山・柳田・關村などを経て 鯨ヶ澤の湊に着く 七つ石の雀部といふ酒屋に宿す
- 一〇 出發 浮田・立石を経て十腰内
- 二 十面澤・藤井・高杉より中別所 車澤の瀧を見に行く 百澤に行き齋藤氏の家

す

- 一四 坂本より 國吉・福村・中野を過ぎ 中畑村の村長三上氏に宿す
- 一五 村市村に行き 去年宿りし家に泊る
- 一六 高森・澤田・小倉・追付・まそまへ・五所などの村々を経て 如來瀬村の古碑を探る 其村に宿かる
- 一七 鳥野・龍の口を過ぎ 岩木川を渡り弘前に入る 中井氏に宿す
- 一八 外瀬とよすの御薬園に醫師の會あり 伊藤(春益)古郡・廣瀬・山崎(永貞)などの人々參集す 小山内元貞に案内せられて行く
- 一九 醫師北川氏の家に出す
- 二〇 和徳の村に間山祐眞を訪ふ
- 二一 福田の古碑を探り 藤崎に出で、川越氏に宿す
- 二二 附近の舊蹟を見巡りて後 水木の毛内氏に行く

三 館の腰の山崎顯貞を訪ふ

六・朔 夕顔塚の今氏を訪ふ 爰にて瘡を病みて寝てしまふ

同じ年

錦の濱の二(秋六)

六・六 病後 館の腰の山崎氏に至り

一七 弘前へ馬で出る

一八 富田村に遊び 山崎道冲を訪ふ 弘前より夜に入りて館の腰に還る

一九 榑村より若松・常磐・東光寺・乳井・鯖石等の村々を経て 宿河原の寺田貞於が家を訪ふ 病起りて臥す

二〇 湯の河原(大鰐)に行きて宿す

二一 北山の麓をあるき 藏館に出て還る

二二 阿遮羅山に採薬す 藏館の湯に移る

本草の道に

二五 採薬行

元 同上 切明の湯に浴して還る

元 けふも山を巡る

七・朔 けふも山々を巡り 尾崎村に宿す

二 町井・平田森・尾上・黒石・上十川を見あるき 本郷村に宿す

三 金屎森のあたりに登り眺望す 苛澤かろはの村を経て中野 醫中河某が家に宿す

四 同行者に別れて浪岡より夕顔堰 金氏に宿す

五 附近の村々をあるく

三 弘前に在り

三 館の腰・夕顔堰を経て 羽野木澤に行きて宿かる

三 小田川こたがは村に泊る

二四 鹿の子山採薬 金木・河倉を経て 中里の米家氏に着く

二五 附近の山野を巡る

二六 追別おつべ・高根を経て 薄市に着きて泊る

二七 あたりの山を探り 夕方薄市を経て今泉に至る

二八 轆轤揚といふ峠路を越えて東海岸に出る 中小國村に宿る

二九 下小國より 蟹田を左に見て中師・石濱 根岸・平館・石崎の村々を過ぎ 宇田の

濱に至る

七

寛政一〇(一七九八) 四五歳

追柯呂能通度ノ一(秋六)

正・朔 平内(東津輕郡)の童子といふ村に年を迎ふ 正月の風俗を観察して詳しい日記を

作る

セ 小湊に出で、久末が家を訪ふ

二〇 なほ平内に居る

一 この一巻は殊に寫生畫が多く又面白い。眞澄の著作中でも優品の一つである。是が寛政十年の正月であることは推測に過ぎないが、九年は西津輕郡、十一年以後は南津輕郡で正月をしたかと思はれるから、多分誤りは無い。次の弘前訪問・岩木山登山の旅は四月から始まるが、小湊・淺蟲を出發點として居るから、なほ寒い間はこの邊に留まつて居たものと察せられ、是も年次は見えぬが同じ年に繋げて置く。

同じ年

「外濱奇勝」の三(秋六)

三・中旬 小湊を立ち 淺蟲に来て入湯す

四・上旬 淺蟲温泉出發 青森の柴田氏を訪ひ 滞在す

セ 青森を立つ 中村・木村・三國などの人々送り來る 浪岡を経て水木の毛内氏へ

九 藤崎の川越氏へ

二〇 弘前に著く

二八 問丸遠藤直規が家に會す 松井勝文等詩歌を贈る

二六 外瀬の薬園に行く 還りて北岡氏を訪ふ

五・二〇 近き村々に遊ぶ 植田の愛宕山・細越・宮館・獨孤・石渡・筒子崎など

三 相馬の澤の奥をあるく 小倉村に宿す

三 外小倉の澤に分け入り 村市村に下りて宿る

四 さぶ澤の山路を巡行す 尾太銀山の廢址を見 阿葛澤あつらざはの荒れたる杣小屋に入りて

宿す

五 砂子瀬を経て河原平に至る

六 暗門の瀧のあたりに藥狩せんと 其澤を登り 中途鬼河邊の杣の空屋に宿す

青森から弘前へ

- 一七 其瀧を見下す處まで登り 再び昨日の柚小屋に還り宿す
- 一八 河原平まで下りて宿とる
- 一九 村市・太秋などを過ぎ 夕方に百澤の齋藤氏に至る
- 二〇 岩木山の麓をあるく
- 二一 守山に登りて採集す
- 二二 岩木山登山 是も採集の爲
- 二三 だけの温泉に行きてとまる 雨連日
- 二四 湯の澤の硫黄堆を見に行く
- 二五 湯の段を経て白澤の一本杉といふ處に行きて泊る
- 二六 長平村を経て十腰内 神職長見某の家（まき）に宿す
- 二七 赤倉山採集登山 暮れて十腰内に還る
- 二八 板柳の醫師高屋玄棟と逢ひ語る

四 出發 長平・長間瀬を経て 濱横澤の村に着く 大雨に柴橋流れたれば 此地に滞在す

七 館前といふ處にて辛くして川を渡り 種里を経て大然村に宿す

八 雨の爲に採集を妨げられ 引返して目内崎村より姨袋 氾濫によつて川を渡り得

九 大野阪を濱邊へ下る 櫻澤・柳田を過ぎ 關村に宿す

九 風合瀬を経て深浦へ 竹越氏は去年の秋焼けたれば 若狭屋といふ宿に泊る 此地に滞在す

二六 深浦に近き六角澤といふ山に採集に行く

二九 山し俣といふ深山に入る 獲る所多からずして還る

七・二 再び六角澤に入る

三 深浦出立 廣戸を経て追良瀬村

四 見立山採集 松原村を経て還る

- 五 追良瀬出發 雨中とらみき蟲木に着き宿す
- 七 升形山 ほつくらといふ澤に入りて採集す
- 八 蟲木を立ち赤石へ
- 九 赤石を出て 日照田を過ぎ 大然村に向ふ

一 「作良かり赤葉かり」即ち櫻狩紅葉狩と題した一巻がある。前半は青森附近の村々の花を見巡つた短文に、多くの寫生畫を添へたもの、後半は弘前から黒石を経て、中野板留のあたりの紅葉を見てあるいた紀行で、是にはその楓の葉の押し型までも載せ、風流至極なものである。年は明記してないが、兩者ともに寛政十年のもので、其年の終りに一冊に纏めたとすれば、日は合ふのである。紅葉狩の文中に、この年八月の名月は、十三湖に行つてながめたと記して居る。しかし其間の日記はまだ出現して居ないのである。津輕領での見聞記は、藩で抑留せられて、眞澄翁の歿後に秋田へ送還せられたと傳へて居るが、其割には寛政十年までは日記の空間が少ない。十一年と十二年とだけは、實際に遺篇が僅かであり、又「栖家の山」の如きは、近

年粗末な複寫本が現れただけで、それも明かに年次を知ることが出来ぬ。

寛政一一(一七九九) 四六歳

錦の濱の一・二(秋六)

正・朔 (南津輕郡)藤崎の川越氏に在つて年を迎ふ 此地方の正月風俗を日記に録す

二 弘前に行く

二六 春秋亭の會

二・五 空也堂の空阿上人送別

二四 五所河原に行き 閑夢亭に宿す

一 是は寛政十二年のものかも知れない。

寛政一一(一八〇〇) 四七歳

栖家の山(秋六)

藤崎の正月

二一一

四・三 (東津輕郡)大濱の澤田氏に在り 青森より爰に來て十二所權現社を拜み櫻の盛りを賞す

四 出發 石神・三内・安田・高田の村々 到る處花多し 館中野にとまる

五 乳内村を経て横内に宿とる

六 幸畑より駒籠へ 神主阿保安澄が家に三宿す

七 川を溯りて大瀧を見に行き 再び同じ家に還る

八 出立 砥山・宮田の村々を巡りて古跡を見 野内に出で 柿崎氏に宿す

三 青森に還る

二 會津の人深澤常逢に逢ふ 吉川流の神道家なり

五・朔 松森・古館などを経て 駒籠(宮崎)の阿保氏に入る

三 筒井・四ツ石・横内・入内・野木・金濱より雄別内 荒川の高水に妨げられて 金濱

に引返して泊る

四 下牛館の贍鹿島社に神主阿保安政を訪ひ 荒川の村に泊る

五 入内村にゆき 村長の家に宿す

六 浪岡の平野氏を訪ふ

九 玉澤村に遊び 日暮浪岡に還る

三 中野村に遊ぶ

四 水木の毛内氏に行く

七 出發 徳下・東光寺・乳井・鯖石を過ぎ 大鰐の名木萩桂を見て 藏館に泊る

八 虹貝を経て 阿遮羅山の麓早瀬野に泊る

九 兩後に山中を遊覽して 鯖石村に來て宿かる

三 乳井・高畑・沖館・荒田・尾上を過ぎ 夕方黒石に入る

一 この日記も、或は寛政十一年のものかも知れぬが、東津輕郡には特に親しい家があつた
北地の春色

らしいから、多分前とは別の年宿で、正月をしたものと想像して、是を翌年の日記と見た。

享和元（一八〇一） 四八歳

錦の濱の三（秋六）

八・四 弘前の中井氏に在り 近く此地を去らんとす

三 出發 角田其友送別の句あり 淺野・笹田などの人々見送り 夜に入りて鯉ヶ澤の菊舎といふ藥屋に宿す 滞在

二四 佐野正學訪ひ來る

二六 人々と大鷹山に遊ぶ

九・三 なほ鯉ヶ澤に在り 近く深浦に行かんとす

一 是も年次が不明だが、多分津輕出發の年であらう。

同じ年

雪の道奥雪の出羽路（秋三）

二・三 深浦の竹越氏に在り 雪すでに深し

四 出發 送別の歌を送る人々 大高安定・浦谷正令・修驗仲覺・敦賀屋其柳・秋田屋二松・加賀屋巴蕉など 岩崎の浦砂間の萱森佐兵衛が家に宿す

五 濱中・松神・大間越を経て 木蓮子の阪を越え 秋田領に入る 關を過ぎて岩館に 着 菊池小三郎が家に宿す

六 小入川・三内・立石を経て椿の浦 更に濱田・湯澤・八森・須田などの村を過ぎ 能代湊の間屋尾張屋（伊藤氏）に宿とる

九 加藤某が家を訪ふ

三 能代出發 八郎潟を左に鹿渡・山矢・鯉河・夜叉が袋 一日市に泊る

三 中野村を経て土崎の湊に入る 矢守某の家に宿す

六 同行者竹越貞易 深浦に還る

秋田領に入る

- 二五 をばた屋といふに宿を移す
- 三・中旬 寺内村を経て久保田(秋田城下)に入る
- 二六 暮の市に出で、物賣る光景を見る
- 三〇 久保田の石田某が家にて年を迎ふ

八

享和二(一八〇二) 四九歳

築き山本(秋二)

- 三・八 (北秋田郡)木戸石村を立ち 増澤の成田某が家に宿す
- 九 下田平の池を見て麻生村 七倉山に登り 小繋の驛に下りて泊る
- 二〇 高岩山に登り 藤琴川の岸に沿ひて 藤琴(山本郡)に至る 加茂屋に泊る
- 三 瀧野澤・金澤などを過ぎ 太良銀山に著く 醫師山田某の家に宿す
- 三〇 鑛山見物

二五 箭櫃山を見に行く

四・八 愛宕山に登る

九 太良銀山を降り 藤琴村

二〇 糟毛村往復 處々の花を賞す

五・五 藤琴を立ち 舟にて仁鮒の村に行く

六・朔 糟毛の不動堂不動の瀧を見て 舟にて長場内ながばないに行き一宿

二 萱澤・室臺・眞土を経て 藤琴に至る

三五 再び太良山に登り 山田氏に宿す

二八 この山中の瀧を見に行く

一 「阿仁の澤水」といふ見ことな寫生畫集は、この中間に出来たものゝやうである。全編の繪が何れも山本郡の方から、阿仁へ入つて行く途中の風景のみで、阿仁山中もまだ雪のかゝらぬ前の景色を描いてある。惜しいことには日記を伴はず、たゞ繪の上に少しの解説があるだ

けである。多分寫生の方に全力を注いだ爲で、別に日記があつて埋没して居るのでは無いのだらう。

同じ年

雪の秋田根(秋二)

一〇・初旬 阿仁の眞木山銅山に在り

三 出發 高平を経て 笹平といふ山間の小村に宿す

三 諸所の鑛山を見て 土山(三枚)に来てとまる 小林氏

五 數々の瀧を見て山路を行く 小出澤に泊る

六 二の股より森吉山に登る 夕になりて還り著く

二・晦 雪中に二の股峠を越え 一の股釜の澤の戸塚氏に宿す

三・四 雪深し 小又の澤の奥なる白絲の瀧を見にゆく 桐内・狭間田を経て森吉の村の

貧しき家に宿を借る

五 雜魚瀧・つるし・小瀧・女木内などの部落を過ぎ 湯の臺に泊る

六 白絲の瀧の下に至る 別路を小瀧村までかへり 新林氏に宿す

八 雪踏人足の跡に附きて 深渡・さこ瀧 鷲の瀨村の四郎平が家に泊る

九 森吉の村を過ぎ 早瀬さうせの吉田氏に至る 風邪の爲に滞在

三 出發 様田・桐内・細越を経て小股村 齋藤綱繼に逢ふ

三 米内澤に至る

四 川を渡り 鶴田・長野・中畑を経て棒山 麻壺澤の太郎助が家にとまる

五 水澤・板戸・大荒木を経て笹館村 田尻・向田も過ぎて 獨鈷村に至る

六 淺利家の城址を見て後 大瀧の温泉奈良某の家に宿る

二〇 十二所村に行きてとまる

三 大瀧に還る

雪中の瀧見物

元 除夜 大瀧の温泉にて年を送る

一 右の日記の序文に、此次に續くのは「贊のしがらみ」だと言つて居るが、現存する「贊乃柵」は六月朔日から始まり、其中間に「芒の出湯」といふ正月から五月までの日記がある。恐らくは次の日記にはさういふ標題を付けようといふ計畫があつたのを、後になつて變更したものである。尤もこの附近は、前にも一度あるいて居るので、其時の見聞も貯へられてあつたのであらう。十二月十二日新屋舖村の條には、春の頃にもこゝへ來たとあり、同日小股村の齋藤氏に逢つた所には、秋の頃手を分ちし云々とある。その春も秋も、共に日記の無い部分である。この日記はすぐに次の「芒の出湯」について居る。

享和三(一八〇三) 五〇歳

秀酒企の温湯(秋二)

正・朔 大瀧の新年風景觀察

元 十二所に行く

閏正・上旬 十二所に行き 武田三益が許に宿

元 十二所に行き 石井政景が家に宿す

二・朔 大瀧の湯元に還り來る

元 又十二所に行く

二 大瀧に還る

三・二五 山に入りて花を見あるく

四・三 大瀧出發 扇田に行く

五・朔 再び白絲の瀧を見に 武田成親(敬夫)同行 新館・獨站・二十九日村・下大葛より

砂子澤 白絲澤に入り 去年知りたる家に泊る

二 白絲瀧を見て後 小又の温泉に行きてとまる

四 爰を立ち 川を渡りて砂子澤へ 小繫・大杉・戸澤・大谷などの村々を過ぎ 二股

村の大葛鑛山に行き 臺所(金吹屋)に宿す 主は荒河富訓といふ

大瀧温泉の正月

- 六 大葛を立ち 大豆村獨鈷村を経て 扇田に著く
- 三 なほ扇田に在り 明石某が家を訪ふ

同じ年

贊の柵(秋二)

- 六・朔 (北秋田郡)扇田の武田氏に在り
- 二 二井田・寺崎・前田・大子内を経て 大披村に宿かる
- 三 小袴村を経て出川村に至る 病ありて佐藤久五郎が家に滞在す
- 七 下河原・篠生・板子石を過ぎ 釋迦内村の酒屋作右衛門が家に宿す
- 八 松峰村に至り 松峰山に登る 山の修驗傳壽院に宿を求む
- 二〇 山巡りして奥の院に詣づ
- 二三 山を降り 姥澤を経て花岡に至る
- 二三 松峰・釋迦内・池内などの村々を経て 扇田に還り 武田敬夫が家に宿す
- 二五 櫃崎村の丸岡定政が家を訪ふ

一 この日記は享和三年、「芒の出湯」につよくものと認められる。七月以後年末までの記事は缺けて居るが、或は年の知れない幾つかの日記の一つに、此中に入るべきものがあるのかも知れぬ。

同じ年

浦の笛瀧(秋三)

- 三・二五 立春 (北秋田郡)川井村に在り
- 文化元(一八〇四) 五一歳
- 正・朔 川井村の新年風俗を寫生す
- 四・三 (山本郡)能代に在り 照井象賢・伊東凌等と共に 萩野の山神祠・長崎の砂山あたりを歩く 玫瑰の花盛り 田植始まる
- 五・五 杉澤附近に藥獵に行く 鹿の城より舟にて渡り 能代に還る
- 七・五 笛瀧一見の旅 能代を立ち 水澤村に行き 皆川吉秀が家に

- 七 女名形の野を過ぎ 八森・湯澤 天龍院を訪ひ 明王瀧の堂に宿す
- 八 出發 濱田村に行く 虫長根の山路に雨にあひ 引返して濱田に泊る
- 九 藻浦・三内などを過ぎ 岩館の菊池氏に宿す
- 一〇 關役人大越某と同行して 舟に乗つて笛瀧を見物に行く

一 幾つかの小さな日記を集めたもので、その空間にも、北秋田の山奥から山本郡の海邊まで、大きな旅行をして居る。最終の七月盆前から、次の男鹿紀行の始まるまでに、又能代を立つて、秋田城下まで出て来て居るのである。但し日記は無かつたのであらう。

同じ年

恩荷奴金風(秋一)

- 八・一四 久保田(秋田城下)應供寺に在り 八郎湖に名月を見んとて爰を立ち 土崎湊に宿す 矢守氏に宿す

- 一五 早朝に土崎を發し 北野を過ぎ 出戸・伊賀を経て 天王の御社に詣つ 神職鎌田利高(筑前)と共に 舟に乗りて湖上の月を賞す かへりて鎌田氏に宿す
- 一六 再び塩口の浦より 舟に乗り湖上を巡遊し 天王に還りてとまる
- 一七 脇本の浦・船越の浦などを舟にて見巡る
- 一八 寒風山登臨 櫻庭・山本・鎌田などの人々同行 先づ大倉村に行き 吉田某を案内に頼む 山に登り 且つ石倉の隠里といふ岩窟を見る 田屋野澤・船越を経て 天王に還る
- 一九 脇本の浦に至り 神職伊東大和を訪ふ 更に比詰村に行き 某氏に宿す
- 二〇 船川・増川・尾名川を過ぎ椿の浦 更に雙六の浦を経て 小濱の浦の長佐藤義右衛門が家に宿る
- 二一 出發 磯づたひに門前の浦に至り 赤神山の御堂に詣つ
- 二二 小雨 馬に乗り舊路を還る 脇本の伊東氏まで

- 一 浦田のかき石村・大保田などを経て 飯森に至る 山を越えて脇木に還る
- 九・五 天王の鎌田氏を出で、ふもと 拂戸・福川・角間崎を経て 鶴ノ木村に宿す
- 六 鮎川村の瀧の頭といふ處を見に行く 寒風山の後山なり 鶴ノ木に還る
- 九 村の長大淵某の家に宿す
- 一〇 出發 堂村・木内・福米澤・野石・五味井子・蘆崎・大口などの村々を過ぎ 濱田村の彌三郎が家に宿す
- 二 蓮沼の邊を過ぎ 黒岡・福田・淺内を経て大路に出で 能代に至り 伊藤祐友が家に入る
- 三 相澤光武が家を訪ふ
- 三 なほ能代に在り 醫師照井象賢の家の菊を見に行く

文化二年(一八〇五) 五二歳

みかべの鎧(秋二)

- 七・朔 (北秋田郡) 榎崎の丸岡氏に在り
- 四 赤石の正壽院に行く 主は修驗悟峯
- 七 出川に在り
- 八・六 阿仁の川井を出て 上舟木の鈴木多左衛門に宿す 川井の齋藤治明(數馬)に逢ふ
- 七 黒瀧見物 松澤村の山奥に入る 山路を越えて森吉村 天津羽を経てさまた 狹股 吉田六郎兵衛が家に宿を求む
- 一〇 森吉山に登る 榎木澤えのきまはといふ山中の村 某半三郎が家に泊る
- 三 戸島内とりのま・中村を過ぎ 打戸村の鈴木長兵衛に宿す
- 三 戸島内に引返し 柴田作右衛門が家に
- 四 野尻を経て鳥越村 高岡六右衛門が家にとまる
- 五 菅生ひだろい・比立内まさし・笑内まほしを過ぎ 山を越えて根子村 此村は全村「またぎ」なり 地主佐藤利右衛門が家に宿す

- 一六 萱草・荒瀬を経て 銀山に至る 館岡喜太郎の家に寓す
- 一七 水無より船に乗り 米内澤よないさわに行く 雨中川井村に著く
- 一八 川井を出で薄井の秋林某の家に行く
- 一九 切石村の鑑明神に詣づ 薄井に還る
- 二〇 川井から田代村に行く 松橋某が家に宿る
- 二一 精進湯の秋景を見に行く
- 二二 田代村を發し 薄井の秋林氏に還る

一 八月に閏が有るので、文化二年の日記といふことがわかる。さうすると八月七日の狭股村の條に、一昨年の冬も來たとあるのは、「雪の秋田根」の旅では無くして、更にその翌年もこの附近をあるいて居たらしいのである。

九

文化三(一八〇六) 五三歳

霞む月星(秋二)

- 二・三 能代を立ち 仁井田・機織を経て 檜山の淨明寺に入る
- 三 住僧獅絃・九島敏里その他數人の青年と共に 母も爺や山の藥師堂に遊ぶ 鶴形村に降り 同行者と別れて小林長左衛門が家に宿す
- 四 出發 筑法師・朴木瀬などの村を見て 米代川の岸づたひに鹿の城じやう・向能代 夜になつて能代の伊東氏に著く
- 五 能代を出で、檜山に行く
- 六 村々の花を見る 淨明寺の主僧 及び達子たつこの近藤傳吉といふ青年同行 その達子村を過ぎ 長面村の近藤氏に行きて宿る
- 七 宮野目・小町・二本杉を経て 増浦に憩ひ 山を越えて種澤・市野村 浦の村に下再び能代に滞留す

- リ 浦横町の兒玉嘉兵衛が家に宿かる
- 一六 高岡權現を拜み 直坂・天瀬川・鯉川・崖を経て 鹿渡浦にとまる
- 一七 醫師青山玄丹・近藤忠右衛門等と共に 猿田さるだの小瀧・苗代澤の大瀧に遊び 夜分鹿渡に還る 村に火災起り 三十戸ばかり焼けたり 仍て曉に此村を立つ
- 一八 牡丹・二つ森・豊岡を経て 檜山に至る
- 一九 能代に還る
- 二〇 牛の首戸村の桃花を見に行き 又筑法師の村を過ぐ
- 二一 仁井田の播磨寺の八重櫻を見て 檜山の寺に行きて宿る
- 二六 能代に還り來る

一 この一卷は殊に美しい繪が多い。春二月の間の眞の遊覽記である。同行者は能代の友人ばかりで無く、幾人かの年若い教へ子を伴なうて、屢々近村の彼等が親の家に立寄つて居るの

を見ると、前年の末頃から能代に假住して、子弟の教育に携はつて居たことが想像せられる。翌文化四年の春夏の旅も、なほ能代を中心として居る。さうして其次の文化五年は、まだ一篇の紀行も見出されて居ないのである。或はこの二年あまりの間は、此湊の人になつて落付いて居たのでは無かつたらうか。眞澄翁の旅には、斯ういふ寓居時代といふべきものがまだ折々は有つたので、それを二箇處だけのやうに推斷したのは悪かつた。陸中前澤でもさういふ日があつたらしく、なほ老後にもそれが何度かあつたかも知れぬ。たゞそれを切上げて又次の漂遊を始めることが、至つて手輕であつたことだけは想像し得られる。

文化四（一八〇七） 五四歳

をがらの瀧（秋三）

- 三・上旬 山本郡岩館を發し 舟にて笛瀧の浦の風景を賞す 引返して小入川の浦に上陸し 三内村の宅藏院を訪ふ 病ありて爰に滞在す
- 三三 出發 椿の浦を通り 濱田の三左衛門が家に宿る
- 三三 八森天瀧寺の不動堂の瀧を見に行く それより山路を母爺おやぢの薬師峯に登りて遠望

- し 湯澤村に降り 醫師細田政興が家に宿る
- 二五 成田元泰等と共に 元館の櫻花を見に行く
- 二七 湯澤を出で、目名湯の智積院に行きて宿す
- 二八 御山権現に詣で 岩子村を経て 大窪平の村長が家にとまる
- 四・一〇 目名湯村を立ち 水澤・高屋敷・鳥湯を経て 強阪村こはさかの醫村木秀庵が家に宿す
- 二〇 畠谷・横内より河内(小元)の山村に分け入り 埴村を経て強阪にかへる
- 二三 強阪村出發 國見を経て常盤村にとまる
- 二四 砂子田村を過ぎ 大柄村おほがらの佐々木八兵衛が家にとまる 村に鑛泉あり 藤の花盛りなり
- 二五 大石といふ部落を経て 上瀧うはたきを見に行く 山谷村より川を渡り 岩阪村の市之助が家に宿す
- 二七 小瀧・梅内・樋野口・飛峯などいふ村々をあるく

五・朔 能代を發して豊岡村 醫師神鳥善繼(敬益)が家を訪ひ宿す

- 二 藤卷の古柵址を見 木戸澤・升澤を経て 長面村の長傳寺に入る
- 六 達子たつこの一應院に行きて宿す
- 二六 能代出發 小繫を過ぎ 今泉(北秋田郡) 驛の長成田氏に一宿す
- 二七 綴子・大館を過ぎて 小雪澤の關を越え 雪澤村に著す

一 五月の下旬に能代を立つて、北秋田郡に入ったのが、恐らくは又新たなる鹿島立ちで、それから約三年後の文化七年の春、男鹿に達し途中再びこの地に來るまでは、主として秋田郡の方に居たのではないかと思ふ。但しこの期間の日記は少ないので、確かなことは言へない。

文化六(一八〇九) 五六歳

ひなの遊(秋三)

六・晦 (南秋田郡)輪田村の伊東氏に宿る

北内に入る

七・朔 ひろか野に遊び 高崎・上野など附近の村を見巡る 輪田に還る

二〇 今戸・小今戸の村々をあるき 又山内村の圓通寺・下山内の金剛寺に行きて 故事を問ひ古器を観る

三 なほ同じ地に在り 踊のことを記録す

一 この一卷は紀行とは言へぬもので、輪田村附近の見聞を細かに書き留めようとした、或は後年の「花の出羽路」の宿案を示したものでは無かつたかと思ふ。次に出て来る「氷魚の村君」「勝手の眞弓」なども之に類する。「ひなの遊」といふのは、今もこの地方に盛んな番樂のことであるが、記述は是以外のさまざまの故事遺跡に及んで居る。寄寓の主人が既に斯翁の識見力量を認めて、或は之を委嘱したのかとも考へられるが、やはり自身で今までの事業の中から、長處と思ふ部分を發揮したものであらう。

同じ年

雪の山踰え(秋三)

三・二〇 五城目古河町 加賀屋彦兵衛が家に久しく滞在して居たのが 今日そこを立つて

山内さんないに行く 黒土村の里長石井與右衛門の家に宿す

三 宿を隣の家に移す

五 富田村に行き 原田儀右衛門が家に宿す

一九 出發中津俣川に沿ひ八田・長面・乙市を経て脇村

一 是から山を踰えて比内ひない(北秋田)へ出たのであらうが、繪のみ存して文章はこゝで切れて居る。文化六年の冬だといふことも明徴は無い。秋田叢書の解題にさう認めて居るのが、當つて居るらしいから之に由つた。五十六の年の冬で、是も亦冒險旅行であつた。

文化七(一八一〇) 五七歳

氷魚の村君(秋三)

正・朔 (南秋田郡)谷地中やちなかの佐藤氏に在りて年を迎ふ 正月の行事を細かに記録す

八 今戸の浦より下りて八郎潟の水渡りを試み 氷の下の魚捕るわざを見に行く

八郎湖畔の正月

二三五

- 一 一日市より夜叉が袋に出で、湖上の網曳きを見る 鯉川にとまる
- 二 引返して一日市 川崎をまはり 五城目の大工の長が家に宿かる
- 三 雪霽れて谷地中に還る

一 この一書の正月風俗記事は殊に精彩を極め、前に挙げた「小野の古里」「津輕のつと」「津輕のをち」「芒の出湯」と共に、永く文化史上の好資料を遺したものであるが、旅行記としては最も小さな断片に過ぎない。後段八郎湖の氷上漁業の記録も亦確實無比のものである。單なる一旅客の遊跡として、記憶に存するにはあまりに惜しいと思ふ。

一 この序を以て正誤して置きたいのは、南秋田郡には谷地中(ヤチナカ)といふ村が二箇所あつて、偶然に續いて出て來るので、自分は之を混同して居たといふことである。その一つは八郎湖の東岸五城目に近く、即ち本書に眞澄が寄寓して居た佐藤家の在る部落、今一つは男鹿の寒風山の北麓で能代との間に在る。次の男鹿記行の始めに、同じ旅人が數日世話になつた加藤氏の家のある村である。山口貞夫君の注意によつて是が明かになつた。

文化七(一八一) 五八歳

雄鹿の春風(秋一)

三・中旬 (南秋田郡)谷地中村を出で、小池の齋藤氏に宿す

二 天瀬川の兒玉氏に一宿

三 舟を得がたくして 陸路鯉川・鹿渡・濱村を経て 足崎の姫御前社に詣で 此浦に泊る

三 釜屋の浦を経て能代に至る

二 西福寺の法然上人六百年忌法會

二 能代を立ち 長崎・浅内・福田・成合・濱田などを通りて 再び足崎に來て宿す

二 馬にて爰を立ち 大谷地・猿川を経て 谷地中(男鹿)に至り 加藤某が家に宿る

二 附近の村々の花を見る

四・七 安土田・濱間口を経て 眞山の村に至り 案内を求めて直ちに山に登る 夕暮に其村に下り 關金七が家に宿す 病ありて滞在

- 一 光飯寺に詣で 什寶古物を観る
- 二 眞山村を立ち 水口村の善八が家に泊る
- 三 主翁の案内にて處々を見巡る 一の目鴻二の目鴻なども見て 水口に還る
- 四 北浦に行き 醫師林宗哲(松菊舎撫琴)を訪ひ 其家に宿す
- 五 五輪野より鳩崎の海へまで行く
- 六 安善寺村に遊ぶ
- 七 野村の小林某を訪ふ
- 八 湯本の温泉に行き 村長平賀氏の家に宿す
- 九 北浦の林氏に還る
- 一〇 湯木より湯の尻の浦に出て一宿す 鹿の聲を聴く 此あたり鹿殊に多し

同じ年

小鹿の鈴風(秋一)

- 五・中旬 北浦を出で、鹿子田・一つ石を経て 湯の尻浦に至る

六・中旬 風を引きて 本山眞山の此月の神事を見に行かず やゝ快くなりて 北平澤より

畠村に行く

- 二三 えぐり舟にて水島を見に行く

- 二四 戸賀の湊一見 對岸の塩戸の浦に行き宿を借る

同じ年

牡鹿の嶋風(秋一)

- 七・三 男鹿の鹽戸の浦に在り この日よき便ありて 剗舟にて島々を見めぐり 加茂の

浦に上陸す

- 一五 雁金の宿見物 月を見つゝ還りて 青沙にとまる

- 一七 加茂より又丸木舟に乗りて 外浦の風景を巡覽す 門前の浦に上陸して 日積寺に詣づ 山を降りて門前の民家に宿かる

一 「小鹿の島風」も文字少なく、寫生畫の最も多い一巻である。「勝地臨毫」の中にもこの以

外に、同じ旅行の際に成つた見取圖が多かつたやうに記憶する。五十八歳の旅人としては珍しい働きぶりであつた。

同じ年

牡鹿の寒風(秋一)

七・八 門前を出で 棒・増川の浦々を過ぎ 脇本・山田を経て 鮎川村に至る。小林某が家に滞留す

三 眞山村の地藏踊を見に行く

八・五 湯本に在りて既に日を経たり

五 海上に出で、月を賞す

七 野村に行きて宿す 地震あり

九・五 脇本に行かんとして 島田村の目黒某が家に留まる

七 大地震 人多く死ぬ

一〇・初 安善寺村に行く 眞壁某が家に宿す

六 三森村の目黒某が家に宿す

五 鮎川の瀧の頭を見に行き 流に沿ひて谷地中に至る

六 中石村ちうしの洞昌寺の僧俊山(東湖)を見まひに行く

文化八(一八一二) 五九歳

正・朔 (南秋田郡)宮崎に新年を迎ふ 鹿倉しかぐらの島山某が家に行く

五 この夜「なまはぎ」の行事を見る 正月の風俗を詳かに記し留む

四 なほこの男鹿東隅の村に在り

同じ年

舊ふる刀やいば金棟かねとう棠たう(秋三)

三・中旬 (南秋田郡)岩瀬の小野氏に寓す

八 岩瀬の萱草祭

五 なほ此地に在り

大地震に遭ふ

四・上旬 脇木の伊東氏に在り 檜山の白井某・久保田の茂木知利(巽)に逢ふ

同 再び岩瀬に還りて滞在す

五・三 小泉の村の長奈良某が家に行く 秋田の人那珂通博(碧峯)・廣瀬有利に逢ふ

三 堀内を経て岩瀬にかへる

中旬 大久保の圓福寺に行く 常陸入四間いっしげんの人渡邊藤右衛門に逢ふ 田屋・沖村・槻木・

本木の村々をあるきて 大久保に還り 鎌田氏に宿す

三 虻川村の神明社に詣づ

二六 鹿島流しの行事を見る

六・四 小泉の雌雄の沼を見て 岩城村に至る 雲性寺の僧謙宗を訪ひ 更に城山に登り

て眺望す

一 この巻の序文に、「久保田のおしね」といふ日記が是に續くと見えて居るが、その書はま

だ私は見たことが無い。久保田は今の秋田市だから、此地を去つてから城下の近くに還つて住んで居たことと思はれるが、もし晩秋までの日記とすれば、それと次の「勝手の眞弓」との関係はどうなるのか。多分は後者がたゞ一日の紀行なるが故に、之を日記の外にしたものであらう。近頃秋田市で発見せられた「花の出羽路」の中には、この一巻を収録して居るといふことである。

同じ年

勝手の眞弓(秋四)

八・一〇 太平山の麓の村々を巡る 手形・大澤・やない里・柳田・八田・瀬田・目長崎など 同

行者は那珂通博・江田純玉・廣瀬有利

一 この一巻を翌文化九年の作とする秋田叢書解題の説は誤りであらう。もしさうだとすれば、次の「月のをろち根」より後の事になるのだが、此書で始めて逢つたといふ人と、一方の書ではもう親しく交つて居る。即ち「勝手の眞弓」の方が早く成つた證據である。此一巻も主として畫圖を録し、本文は僅かに一日の遊覽を記するのみで、それも土地の沿革を考證した部分が

大平山麓を巡る

二四三

多い。

一 次の「月のをろちね」の中にも、昨年秋同じ山の麓を巡行したといふ記事がある。それが多分この「勝手の眞弓」の、八月十日のことをいふのであらう。この中間に「水の面影」と「麻裳の浦風」との二巻が成つたといふことが、亦この書の巻頭に見えて居るが、前者は寺内村の舊蹟を録すといひ、後者は土崎の湊の見聞記だつたといふから、共に紀行といふよりも地誌に近いものであつたらう。此春の日記としては、別に「千枝の櫻」といふ一巻があると書いて居る。この三つの書も捜せば何れかに在るのかも知れぬが、遺憾ながら自分はまだ見て居らぬ。秋田叢書には各家の蔵本をよく集合して居るが、それにもまだ此通り缺けた部分が多いのである。

文化九(一八一三) 六〇歳

月のをろち根(秋四)

七・三 (南秋田郡)寺内村に在り 土崎の岩谷貞雅訪ひ來り 太平山登山を約す

一六 出發 同行岩谷貞雅・鎌田正家 八幡田・山崎・水口・添川・八田を過ぎて 自長崎

(元町)に至り 嵯峨勝珍(理右衛門)が家に宿す

一八 那珂通博・淀川盛品(東市)・樋口忠一(音藏)秋田より來り會す

一九 爰を出で、寺庭・稻荷・黒澤の村々を経て 野田の東光庵に憩ひ 山嶺を究めて後

大平山の權現堂に宿す

二〇 雨中に山を降る 夜に入りて自長崎に還り來る

二一 午後出發 柳田村の鎌田藤右衛門が家に宿す

二二 爰を立ちて 貫束山・天楯山などに登る

文化一一年(一八一四) 六二歳

高松日記(秋四)

九・五 (雄勝郡)板戸村に在り 曾我吉右衛門といふ老翁と共に 附近の山村を見巡る

三津川村を経て 川原毛温泉に至り 硫黄小屋の長の家に宿す 夜大いに雪降る

六 泥湯の温泉を経て萱野に出づ 沼多く紅葉うつくし 上新田村の藤原藤八が家に

太平山登山

二四五

宿す 二泊

八 若畑村を経て 板戸村に還る 三浦氏に宿す

一 「雪の出羽路」の初稿かと思はれる。此地方を高松庄と呼ぶ故に、まだ発見せられない霧の高松」といふ書も是と同じかと 秋田叢書の解題には説いて居るが、恐らくはさうであるまい。なほ叢書の同じ巻には、某年八月十九日、同じ雄勝郡檜山の高橋氏に在りて、附近を遊覽した「駒形日記」といふ一文を載せて居る。是も文化十一年か十二年のものだらうといふが證據は無い。たゞ此頃は著者が雄勝郡をあるいて居たゞけは事實だと思ふ。「狛形日記」といふ書名は、「筆のまに／＼」にも誌して居るが、それには深山の鶏の聲の事を書いたとあつて、此本には見えない。別にもつと詳しく書き改めたものがあつたのであらう。

一 以上年次のほゞ明かな數十巻の外に、なほ二三の紀行の、いつの年とも知れぬものがある。其中でも完備に近いのは「十曲湖」、即ち十和田湖の遊覽記で、是は自筆本がなほ保存せら

れ、秋田叢書別集巻一には、之に伴なふ十數葉の寫生畫までも模刻して出して居る。南部叢書巻六のは、文章ばかりで又若干の誤寫がある。八月十九日に鹿角郡毛馬内ウマナを出發して、途中鳥越村の和田氏に一泊し、翌日は山を登つて湖岸に出で、鉛山の事務所に滞在して、附近を見巡つた後に、同じ月の三十日、大倉の本山といふ鑛山に下つたまでの日記である。同行者は松尾某で、その同胞の小笠原某と駒ヶ嶺政福といふ二人が、その鉛山には住んで居た。秋田に二度目に入つて來てから、よほど年數を経て後といふことはわかるが、いつの年だつたかはまだ明かになつて居ない。但し六十歳以後は多く南の諸郡をあるいて居たと思はれるから、大よそは文化の初年、殊に日記の全く傳はつて居ない文化五年などでは無かつたかと想像する。或は書中に出て居る幾つかの人の名から、この想像の當るか否かを決し得る時も來るであらう。

一 毛馬内には同じ年の春から、滞在して居たのではないかと思はれる。是も大館の栗盛財團の蒐集に、「錦木」と題した雜綴が一冊あつて、その一部分だけが鹿角郡に關するものであり、錦木塚その他の見取圖が數葉と、僅かな文章とが保存せられて居る。秋田叢書別集巻一にはその部分だけを採録して居るが、やはり「錦の濱」などと同様に、老後に整頓しようとして力

及ばなかつたものらしく、その年彌生の末つかた、出羽から國境を越えて鹿角郡に入り、毛馬内の町に落着いたといふまでの記事と、更に七月の初め頃に、その毛馬内の附近を見あるいたといふ一文の、末切れたものがあるだけである。それと前に擧げた「十曲湖」の遊覽記と、一續きのものだといふ確證は無いが、兩者共に附載した漢詩の作者の中に、東郡源尚といふ人名などが共通して居る。源尚は遊歴の文人であらうから、旅中に相逢つたので無いまでも、さう永い間は名が残つて居ようとは思はれぬ。年をちがへて二度まで、毛馬内に行つたのではないと見てよからう。

一 次には「雪のおろちね」といふ十數紙の寫生畫集がある(秋四)。おろちねは今の大平山の別名で、其山を中心にした雪中の風景を描き、少しの解説を加へて居るのだが、この際は登山をしたので無いかも知れぬ。山上のスケッチが一枚も見えないからさう思ふ。文化九年の「月のおろちね」には、この冬の日の旅行の事はまだ説いて居らぬのを見ると、多分はその事よりも後の旅行であらう。畫風も少しばかり他の諸集とは變つて居る。なほ「勝地臨毫」を詳しく見たならば、記事は無くて畫圖のみ残して居る旅が他にも有らうと思ふが、今は原本を手にする

ことが出来ぬので、それを尋ねて見る方法が無い。

一 文化六年の前年には、なほ「浦の梅園」と「花の眞阪路」といふ二つの日記があるといふが、二つともまだ發見せられて居ない。前者には今の南秋田郡旭川村附近のことが誌してあるといふが、どうして「浦の梅園」と題したかは明かでない。或は海岸の方から此土地まで、入つて行つた紀行では無かつたかと想像する。「花の眞阪路」は六月末までの日記であつたことが、「ひなの遊」の序文に見えて居る。恐らくは山々の花の頃から書き續けたものであらう。

一 この他に「山分け衣」「杜の下蔭」「櫻狩日記」「椎葉日記」等の著述があるといふことを、著者自ら「筆のまに／＼」の中に誌して居る。後の二つは現在栗盛財團の文庫に藏せられる「さくらがり」「椎の葉」といふものがそれらしく、前者は北秋田郡の記事、「椎の葉日記」は雄勝郡のことを録したものだといふが、自分はまだ二つとも見て居らぬ。同じ文庫には又「萬元紀行」といふものがある。是も或は色々の小さい日記を集めたものではなからうか。どうかして一度讀んで見たいものと思つて居る。「杜の下蔭」は北秋十二所町の老ノ大神社の事を書いたものと

いふから、日記では無くして、たゞ「花の出羽路」の資料のやうなものだつたかも知れぬ。

一年をとり巡歴の區域の限られて来るにつれて、この翁の日記は自然と地誌に近くなつて来て居る。さうして其地誌も亦必ず實地を踏んだ後に書いたものだから、紀行の分が多く残つて居る。殊に以前の旅の記憶を想ひ起して、新たなる見聞と比較して見ようとするのが、若い頃からの眞澄翁の趣味であつた。さういふ機會が段々と少なく、一方には又古い知識はふえて行くばかりなので、いつと無くそれが日記の外にはみ出して、別に十數種の隨筆となつて残つたのである。諸國の民謡を集めた「鄙の一曲」なども、實際は古い手控への中から、後に拔出して整頓したものゝ様である。是に類するものでは「百白圖」、また「新古聖品類圖」などいふのも残つて居る。「凡國風土器」といふのは珍しい標題だが、諸國の旅先で見た色々の器物、その他行事遊戯などの寫生畫で、是などは既に三十四五歳の頃から、こしらへて持つてあるに居た證據がある。それが秋田縣の遺物の中にも有るといふから、内容は無論非常に増加して居ることゝ思はれる。秋田 書別集卷四に出て居る「花の眞寒泉」といふのもその一つの例であつた。是は序文によると「櫻がり」の次に書かれたもので、諸國の旅で立寄り栴び上げた名ある

清水の數十箇所を列記して居る。或は莖の花の種類の土地によつてさまざまなるに心づいて、百莖といふ一卷を書いて見たくなつたといふことも、「をがらの瀧」といふ日記には見えて居る。其本は出来たかどうか知らぬが、とにかくに繪がかけて文章が自由だつたから、書物を作ることにやゝ道樂のやうにもなつて居たことは事實で、しかもそれが皆この非凡な旅行家で無くては、望まれないことばかりであつた。

一 雪月花の出羽路に著手してからは、各地を巡歴しても滞留の日數が多く、又遠く移つて行くことが少なく、行逢ふ人たちも古い馴染ばかりなので、旅をして居るといふ氣持にはなれなかつたらうが、翁には依然として還つて行くべき家は無かつた。文化の末頃からの十數年の遊跡は、もう一續きの紀行としては傳はらぬが、家々に保存せられて居た手紙から、歌文繪畫の數多い作品から、又は地誌各篇の内容を比べ合せて見るによつて、追々に之を明かにすることは出来るであらう。恐らくは四十年來の習はしのままに、二年と同じ處の正月を祝はずに、過ぎて居たものを私などは想像する。文政十二年の七月十九日、仙北角館の附近の梅澤村の假寓で歿したといふのが事實らしいが、表向きに記録には角館の神官、鈴木某の家でとい

ふことになつて居る。門弟鎌田正家等は更にその遺骸を迎へ取つて、今ある寺内村の墓地に葬つたと傳へられる。乃ち菅江眞澄の旅は、死んで後までもなほ續いて居たのである。

寫眞解説

一 信州の七夕人形

巻初

菅江眞澄の寫生畫の一つの例として之を掲げる。この旅行家の最初の日記「伊寧乃中路」天明三年七月七日の條に出て居るもので、

六日より軒ばに方なる木にて女男のかたしろを造りて絲に引きはへてけり
とあるのみで、場處はどことも記してないが、それが洗馬村の釜井菴であつたことは、第三の寫眞と比べて見ればよくわかる。

二 晩年の菅江眞澄

對 二六頁

秋田縣六郷町の高橋氏に所藏せられるもの。あの奇怪な風説の種になつた肖像畫である。同じ仙北郡板見内村の出原某の家に傳はり、翁が鏡に映して自ら描いたものといふが、その點も私は信じて居ない。筆致構圖の上からも、他の本職畫家の作であることが、今に證明し得られると思ふ。とにかくに翁がこの地方を巡遊して居たのは文政八九年以後のことだから、

是は七十歳もやゝ過ぎて後の面影で、容貌服装も恐らくは亦當時の眞を寫して居ると思はれる。同じ家には又加藤月鑑といふ人の書いた眞澄翁の傳を、この畫像と對幅にして持つて居る。翁の歿後三十八年、慶應二年六月に成つたものだが、是には明かに享年七十六とあつて、碑文に七十六七といふのを決定して居る。何等か別に據る所があつたのであらう。

三 最近の洗馬釜井菴

對 一一六頁

前の七夕のスケッチと比照する爲に、特に同じ角度からとつて見た寫眞である。「伊寧乃中路」の此日の條には、別にもう一枚、村の娘たちが踊を踊つて居る畫が出て居るので、それとも比べて見る爲に、特に最近の勤勞奉仕姿といふものを殘して置く。二人の男子は「菴の春秋」その他の遺書の發見に、最もよく働いた中村盛彌君と大池蠶雄君とである。是も記念の意味であるが、殘念ながら寫眞がはつきりしない。

四 釜井菴にあつた無名氏像

對 一二二頁

或は菅江眞澄三十一歳の日の肖像ではないかと思ふもの。しかし此書物の校了になるまで、終に確かな證據は得られなかつた。詳しくは本文一二二頁に述べて居る。

五 菅江眞澄の墓碑

對 一三八頁

秋田市の西に接した寺内村の字大小路の岡の上に立つて居る。碑面に長篇の歌を刻した珍しい様式の墓碑である。其歌の文字をやゝ読み易い形にして爰に掲げて置く。

友どちあまたして石碑に書付くる

三河の渥美小國田

雲はなれこゝに來居りて

夕星のかゆきかく行き

年まねく遊べるはしに

かしこきや殿のみことの

仰せごといたゞき持ちて

いそのかみ古き名どころ

まきあるき書けるふみをら

鏡なす明徳館に

ことくゞにさゞげ納めて

劍太刀名をもいさをも

よろづ代に聞えあげつる

はしきやし菅江のをぢがおくつきどころ

鳥屋長秋

同じ石の側面には

文政十二年己丑七月十九日卒年七十六七

といふ文字が刻まれて居る。

菅江眞澄

昭和十七年三月一日 印刷
昭和十七年三月六日 發行

定價 壹圓七拾錢

著者 柳田國男

發行者 矢部良策

印刷者 植田庄助

東京市神田區三崎町二丁目四番地

版元 株式會社 創元社

電話九段(33)四五三八番 五〇八三番
振替東京一五六五番 大阪五七〇九九番
會員登錄番號一一五五〇三番

配元 東京市神田區渡路町二ノ九 日本出版配給株式會社

創元選書の刊行について

良書は永遠の若さに輝き、萬人に必讀されることを深く欲する。如何なる新しきものよりも常に新しく、あらゆる文化の源泉となつて盡くすることを知らない。良書の普及こそは身を出版にささげる者の片時も忘るることを得ない責務である。吾人は絶えずその點に留意し、あくまで公明なる手段と眞摯なる努力を以て、躍進日本の要路に關ひ、且出版事業の眞使命に悖らざらんことを念願として來た。如上の微意に基き吾人はここに「創元選書」を刊行せんとする。收むる所は眞に萬人の血となり肉となるべきあらゆる種類の良書であ

るが、これが選書には獨自の立場から慎重なる検討を重ね、有名無名たるを問はず、専らその本質的價値にのみよる可きことを主眼としたものである。しかも體裁の典雅、印刷の鮮明、製本の堅牢、價格の低下等に細心の注意をはらひ、飽くまでも世の讀書子の共有たらんことを期した。吾人は本選書が微力ながらも國民の教養を高め、正しき批判的精神と良心的行動との良き指針の一助ともなり、將來日本の文化建設の礎石とならんことを切願して歎まぬ。

昭和十三年十二月

創元選書既刊目錄

牧野信一著	心象風景	(53)	一・三〇〇
中谷宇吉郎著	日本の科學	(51)	一・二〇〇
柳田國男著	妹の力	(55)	一・六〇〇
谷崎潤一郎著	猫と庄造と二人のをんな	(56)	一・六〇〇
西堀一三著	日本茶道史	(57)	一・四〇〇
小林芳雄著	精神と情熱とに關する八十一章	(58)	一・六〇〇
齊藤隆三著	近世世相史概観	(59)	一・四〇〇
河竹繁俊著	河竹默阿彌	(60)	一・六〇〇
佐藤正彰著	詩について	(61)	一・二〇〇
石濱純太郎著	富永伸基	(62)	一・二〇〇
川田 照著	西行研究録	(63)	一・〇〇〇
チエホフ著 熊鷹芳子譯	續妻への手紙	(64)	一・五〇〇
伊東忠太著	法隆寺	(65)	一・四〇〇
高村敏多著	秋立つまで	(66)	一・七〇〇
新村 出著	日本の言葉	(67)	一・六〇〇
柳田國男著	豆の葉と太陽	(68)	一・四〇〇
額原退蔵著	芭蕉・去來	(69)	一・四〇〇
荒木良雄著	宗 祇	(70)	一・七〇〇
山口 鼎著	近世小説上	(71)	一・四〇〇
山口 鼎著	近世小説中	(72)	一・四〇〇
森 健三著	渡邊崋山	(73)	一・七〇〇
山口 鼎著	近世小説下	(74)	一・四〇〇
小寺誠吉著	日本の舞踊	(75)	一・七〇〇
大田 亮著	姓氏と家系	(76)	一・八〇〇
宮崎嶺雄著	谷間の百合下	(77)	一・八〇〇

創元選書既刊目錄

濱田青陵著	考古學入門	(78)	一・四〇〇
三木 清著	人生論ノート	(79)	一・三〇〇
齋藤隆三著	大痴芋錢	(80)	一・六〇〇
柳 宗悅著	工 藝	(81)	一・六〇〇
正宗白鳥著	作家論(一)	(82)	一・七〇〇
小林秀雄著	歴史と文學	(83)	一・三〇〇
三宅周太郎著	續文樂の研究	(84)	一・八〇〇
正宗白鳥著	作家論(二)	(85)	一・八〇〇
渡多野精一著	基督教の起源	(86)	一・五〇〇
内田清之助著	鳥	(87)	一・八〇〇
柳田國男著	菅江眞澄		
柳田國男著	方言		
山内義雄著	日 本		
クルチニコフ著 大野俊一譯	フランス文化論		

近刊豫告

以下續刊

終

